

シラー美的教育論をめぐる諸論の包越に向けて

——『美的書簡』批判の四類型——

教育学コース 井 藤 元

Over the Studies on Schiller's Theory of Aesthetic Education:
Four Categories of Criticisms to Schiller's *Aesthetic Letters*

Gen ITO

The purpose of this paper is to open up the possibilities of reconstructing Schiller's theory of aesthetic education.

The paper begins by classifying the criticisms that have been made to *Aesthetic Letters* (*On the Aesthetic Education of Man*) into four categories. The first category proposes that the theory of *Aesthetic Letters* is full of inconsistencies. The second one puts forward the idea that the book is composed of the two different parts. The differences of opinion split his theory into two sections. The third category advocates that the theory of *Aesthetic Letters* is out of touch with the reality. Finally, the fourth one considers that the theory is an unfinished work since Schiller did not reach a conclusion.

In this paper the theory of *Aesthetic Letters* is reconstructed by using Schiller's theory of Sublime (*On the Sublime*). Through the systematic analysis of his theory of Sublime, it is possible to open up new horizon for interpretation of Schiller's aesthetic educational theory.

目 次

- I. はじめに——『美的書簡』への賛辞と批判
- II. 『美的書簡』批判の四類型
 - A. 『美的書簡』矛盾説——批判の第一類型
 - B. 『美的書簡』分裂説——批判の第二類型
 - C. 『美的書簡』現実遊離説——批判の第三類型
 - D. 『美的書簡』未完説——批判の第四類型
- III. 「美」は「手段」か「目的」か——「崇高論」に依拠した回答
- IV. おわりに——シラー美的教育論再構築への展望

I. はじめに——『美的書簡』への賛辞と批判

本論考は F. シラー (1759~1805) の『人間の美的教育についての書簡 *Über die ästhetische Erziehung des Menschen* (以下、『美的書簡』)』(1795) に対する多種多様な批判を類型化し、その類型化に基づき、シラー美的教育論再構築の可能性を示唆するものである。

『美的書簡』はその発表以後、極めて多くの思想家、芸術家、作家によって言及され、様々な解釈がなされてきた。具体的には、ゲーテを始め、カント、フィヒテ、フンボルト¹⁾、ヘーゲル、ヘルダーリン²⁾、ノヴァーリス、シェリング³⁾、デイルタイ⁴⁾、ニーチェ⁵⁾、ヴィンデルバント、デューイ⁶⁾、ベルクソン⁷⁾、シュタイナー⁸⁾、ミード⁹⁾、カッシーラー¹⁰⁾、ユング、シュプランガー、ルカーチ、ハイデッガー¹¹⁾、リード¹²⁾、マルクーゼ¹³⁾、ノール¹⁴⁾、ガダマー、エリクソン¹⁵⁾、アドルノ¹⁶⁾、ハーバーマス¹⁷⁾、ポイス¹⁸⁾、エンデ、イーグルトン、シュスターマン、ロロ・メイ¹⁹⁾、ド・マンといった著名な論者がこのテキストに言及し、各々の文脈で『美的書簡』を引用・解釈している。

『美的書簡』への賞賛の数例を挙げるならば、カントはシラー宛の書簡(1795年3月30日)にて「『人間の美的教育に関する書簡』はまことにすばらしい」、「いつかそれについての所見を申し述べるために、それを研究したいと思っています²⁰⁾」と書き送り、ヘーゲルは1795年4月16日付のシェリング宛の書簡で、シラーの美的教育論は傑作であると記している²¹⁾。また、ノヴァー

リスは、シラーを「来るべき世紀の教育者」と評し²²⁾、ユングは、「今日の心理学で今ちょうど評価され始めている視点を磨き上げて提供している²³⁾」として、『美的書簡』を高く評価する。さらに、作家ミヒャエル・エンデは『美的書簡』について、「それまでもそのあとも、このテーマに関してこれ以上知恵のあることは書かれていない」とし、「この問題にかかわる人たちがこの作品を真剣に学ぶ努力をすれば、現代の芸術や文学がおかれた状況はもっとよくなっていた²⁴⁾」だろうと述べ、これを絶賛している。

『美的書簡』は、数多くの思想家、芸術家から高く評価される一方、賛辞と同様(かそれ以上)、多くの批判を浴びている。シュブランガーは『美的書簡』はシラー哲学の中で最も難解なものであり、ドイツ哲学の中でも最も難解なものの1つである²⁵⁾という指摘と共に、シラー哲学は、誰もが認めざるをえないような矛盾にみちている²⁶⁾と述べ、シラーの哲学的著作における思想的不一致や矛盾を検証することは、きりのない作業であるという。その難解さと内容の矛盾に対し、発表当時から²⁷⁾現代に至るまで『美的書簡』批判は繰り返され、枚挙に暇がない。最大限の賛辞を受ける一方、他方ではこの上ない批判を浴びており、『美的書簡』への評価は両極的である。その内容分析に関しても、『美的書簡』は、難解且つ極度に抽象的であるがゆえに多様な解釈を許し、真意解明は極めて困難だとされる²⁸⁾。

そこで本論考では、『美的書簡』解読のための基礎的な作業として、先行研究における『美的書簡』批判の整理を行う。『美的書簡』への批判内容を確認することで、このテキストに内在する問題を暴き出し、シラーの真意解明を困難にする要因がいかなるものかを見ていく。『美的書簡』批判の整理は既に長谷川哲哉によってなされてはいる²⁹⁾。しかしながら、そこで提示されている思想家の数は少数であり、またそれは思想家ごとの『美的書簡』批判を列挙し、羅列したものにすぎない。これに対し本研究では、多様な『美的書簡』批判のうち、同一傾向を有する批判を批判の内容ごとに類別することを試みる。すなわち、『美的書簡』批判を四つの範疇(①『美的書簡』矛盾説、②『美的書簡』分裂説、③『美的書簡』現実遊離説、④『美的書簡』未完説)に類型化し、それぞれの観点からの『美的書簡』批判を概観する。従ってこの分類法の下では、ある思想家が『美的書簡』に対し、矛盾説、現実遊離説を共に主張している場合があれば、この思想家は、矛盾説、現実遊離説、双方の項に登場することになる。こうした分類法により、『美的

書簡』への批判的見解はあまた存在するものの、それらは互いに空集合ではなく、大別すれば四カテゴリーに類型化可能であることが示される(本論考は、多種多様な『美的書簡』批判を整理し、その問題点を明確化することに主眼が置かれている。註の分量が本文に比して多くなったが、それは同種の批判、解釈を、重複して引用することを避け、本文中にではなく、註に示すこととしたためである)。尚、結論を先取りするならば、筆者は『美的書簡』批判の四類型のうち、『美的書簡』未完説に依拠する。『美的書簡』未完説を前提とすることで、『美的書簡』への諸々の批判に応答するための論拠を見出すことも可能となるように思われる。シラー美的教育論の再解釈に向けた可能性は、第Ⅲ節において提示を試みる。まずは『美的書簡』批判の第一カテゴリー、『美的書簡』矛盾説から見ていくことにしよう。

Ⅱ. 『美的書簡』批判の四類型

A. 『美的書簡』矛盾説——批判の第一類型

『美的書簡』批判の第一類型は、『美的書簡』の矛盾を指摘する、『美的書簡』矛盾説である。『美的書簡』の矛盾点の指摘はしばしばなされるが、代表的な指摘はガダマーによるものである。

ガダマーは、『美的書簡』では「美」が一方で「手段」として位置づけられ、他方で「美」それ自体が「目的」とされる点に論旨の屈折を見出し、『美的書簡』では「芸術による教育は芸術への教育となり、芸術によって用意されるべき真の道徳的で政治的な自由に代わって、<美的国家>の形成、芸術に関心を抱く教養社会の形成という考えが現れ³⁰⁾」るとし、ここに『美的書簡』の矛盾を見て取る。

イーグルトンは、同様の点に関し「シラーの作品は、知らず知らずのうちに、一方では道徳律を美的なものよりも上におき、また一方では美的なものを道徳律よりも上において、分裂しているように見えてしまう³¹⁾」とし、「シラーのテキストの終わりにいたると、美的なものは、理性のしもべとしての慎ましい地位を乗り越えようとしているのではないかという兆しを見せる。本来ならば美的なものを補佐役としてしたがえるべき道徳律が、ひとつの際立った点において、美的なものよりも劣っているように見えてしまう³²⁾」と述べ、ガダマー同様、「美」が「道徳的状态」に至るための「手段」として論じられつつも、終盤では「道徳的状态」の上位に位置づけられてしまう点に矛盾を見出している。

この点に関して、ヤンツは『美的書簡』では、「美」が中間段階か最終段階かは特定できず、二面性が存在すると述べる³³⁾。中間段階として見るならば、「美」は、道徳的には何ら決定されていない状態であり、「美」自体は道徳的ではなく、道徳的行為を可能にするだけである。シラーが「美」を中間段階とみなすところでは、理性のみが道徳的行為の基礎づけを可能にするというカントの主張と重なる。しかしながら、「美」を主観性の完成とするならば、カント倫理学の主張とは相反する。こうしてヤンツは『美的書簡』には、相矛盾する二つの目標が掲げられていると述べる。周知の通り、シラーはカントの『判断力批判』に深く感銘を受けて美学研究へと導かれた。『美的書簡』、第1書簡でシラー自身、「これから述べます私の主張の大部分が、カントの諸原理に基づいていることを、[...]隠すつもりはありません³⁴⁾」と告白しているように、『美的書簡』の根底にはカント哲学の枠組みが内在している。しかしながら、『美的書簡』のうちには、カント哲学を超え出る要素が含まれており、そうした要素がカント哲学に依拠した部分と齟齬をきたしているのである。この三者に限らず、「美」は「手段」か、それとも「目的」か、という問題は多くの論者によって繰り返し取り上げられ、『美的書簡』解釈上の難題とされてきた。(同様の批判は、レーマン³⁵⁾、ヘンリッヒ³⁶⁾、五郎丸³⁷⁾らによってもなされる。)

さて、他の観点から、西村は『美的書簡』の重要概念たる仮象概念が孕む矛盾を指摘する。西村は、『美的書簡』の終盤で登場する「美しい仮象の国」概念に関して、「美しい仮象の国」が「現実的」なものであるとするならば—それは「自然的国家」や「道徳的国家」と同次元において関係せざるを得³⁸⁾ず、そうだとすれば、それは「仮象」と「実在」とを峻別すべしという主張と矛盾することになると述べ、シラーの議論は仮象の世界の存在論的な規定と美的教育の構想との間で、我々にアポリアを突きつけるという。つまり、仮象の世界をもつことにより「自然的状態」から「道徳的状态」への媒介が可能となるならば、仮象の世界は、何らかの意味で実在性と関係せざるを得ないはずである。他方、仮象と実在を峻別するという前提に立てば、「美しい仮象の国」は自然的国家や道徳的国家とは別次元の存在となり、同次元での媒介機能を断念して、それ自体が固有の価値を持つものとして志向される他はない³⁹⁾。西村はこうした点に『美的書簡』の仮象概念の孕む矛盾を見て取る。

B. 『美的書簡』分裂説——批判の第二類型

『美的書簡』批判の第二カテゴリーは『美的書簡』分裂説である。矛盾説において指摘された、「道徳的状态」への移行「手段」としての「美」と「道徳的状态」よりも上位に置かれた、それ自体を「目的」とする「美」との間の矛盾・動揺の問題に関し、分裂説の論者達はこれをテキストの成立における構造上の問題と見る。

『美的書簡』はそもそも「アウグステンブルク王子宛の書簡(以下、「王子宛書簡」)(1793)をもとにした書簡体論文であった。「王子宛書簡」は1791年、病に苦しみ、経済的窮地に立たされていたシラーを、年金授与によって救出したデンマーク王子(アウグステンブルク公)に対し、返礼として書かれた。『美的書簡』のもととなるこの「王子宛書簡」は、しかしながら、1794年2月26日に生じたコペンハーゲン王城の火災の際に焼失してしまう。王子はシラーに対しその復元を要請し、シラーも手許にあった写しをもとにして新たに書き直すことを約束したのであるが、結局この約束は果たされなかった。他の作品の計画や健康上の理由のため仕事が渉らなかつた上に、ゲーテ、フンボルト、フィヒテ等との交遊を経て、「王子宛書簡」にあきたらなくなつたためである⁴⁰⁾。かくして「王子宛書簡」に修正が加えられ⁴¹⁾、内容も学問的な体裁に整えられて、この書簡は『人間の美的教育についての書簡』として翌年ホーレン誌に発表された。「王子宛書簡」では「美」は専ら「手段」として位置づけられ、完結した論を展開していたのであるが、『美的書簡』においては新たに「目的」としての「美」が加わり、ここに分裂が生じることとなるのである。

『美的書簡』成立におけるこのような事実をもとに『美的書簡』分裂説が打ち出された。その代表はルッツである⁴²⁾。

ルッツは『美的書簡』には第一に「三段階理論」の層(層I)が存在し、この層Iでは、文化及び人間の状態が三段階に分類されるという。このうち最も低い段階が「自然」であり、到達することが望まれる最高の段階が「理性」の段階である。そして、「自然」から「理性」に至る手段として、両者の中間段階に「美」が位置づけられる。従って、層Iにおける「自由」とは、カント的意味における超感性的自由を意味する。対して、層II(この層をルッツは「統一理論」の層と呼ぶ)では、「美」は「自然」と「理性」の統一として、両者の上位に位置する。層IIでは「美」は到達目標とされる。ルッツは層Iと層IIの分布を示し、この分布を「王子宛書簡」との比較により説明する。先に言及した通り、『美的書簡』は、

シラーの思想的進展に伴い、「王子宛書簡」を内容的に発展・充実させたものであったが、「三段階理論」は「王子宛書簡」の中心理論であった。つまり、層Ⅰが見られない部分が『美的書簡』において付け加えられた箇所なのである。『美的書簡』執筆に際し、シラーは自らの理論を「統一理論」をもとに新たに書き下ろすことはせず、「王子宛書簡」の大部分を残した。ルッツは、こうして『美的書簡』では両層の動揺が見られることとなったと述べ、その結果『美的書簡』は構造上分裂するに至ったという⁴³⁾。

そうしたルッツの指摘は『美的書簡』の内容的分裂の原因をその成立事情に即して構造的に暴き出しており、このテキストがその出自において先天的に論理的矛盾を孕まざるをえなかったことを説得的に論証している。(『美的書簡』分裂説の論者としてはルッツの他にデュジング⁴⁴⁾が挙げられる。)

C. 『美的書簡』現実遊離説——批判の第三類型

『美的書簡』で描かれる内容は、現実と切り離されたユートピアにすぎないと主張するのが、『美的書簡』批判の第三類型、『美的書簡』現実遊離説の論者達である。『美的書簡』の非現実性を指摘する議論は数多く見られるが、この論陣を張るガダマーは、以下のように述べる。

「なるほど、感覚の世界と道徳の世界というカントの二元論は、美的遊びの自由と芸術作品の調和という考えに見られるような形で克服されはしたが、克服されたこの二元論は、それとともに新たな対立関係の枠にはめ込まれることになった。つまり、理想と生とを芸術によって融和するといっても部分的な融和にすぎず、美と芸術は現実に対して単に美化するだけの束の間のほのかな光を与えるものでしかなくなったのである⁴⁵⁾」

ガダマーは、シラーにおける自由は、美的国家においてのみ可能な自由でしかなく、現実における自由ではないと批判し、『美的書簡』で示された「美的国家」とは芸術に関心を抱く教養社会の形成を意味するにすぎないという。

ルカーチもマルクス主義的視座から『美的書簡』の非現実性を以下のように指摘する。シラーは「市民的社会を、革命の危険なしに、内部から基礎づけるのに適当な手段を、美学において発見しよう」としたものの、「思想的に明晰にスケッチしたユートピアを提出することさえも」できていないとし、『美的書簡』の結末部

において、断念的結論(「美的仮象の国はどこに存在するか」、「これは少数の、選りぬきのサークルのなかになだけ見つけれられるのかもしれない」)に至るといふ⁴⁶⁾。さらに、「美的国家」概念は、シラーの社会現実に対する深いペシミズムを示していると述べ、シラーの構想が内面的なものにとどまっていることを批判し、「存在を意識から、土台を上部構造から、原因を結果からなどなどと、演繹しようと試みている⁴⁷⁾」として、シラーの美的教育論を批判する。

また、シュスターマンは『美的書簡』について論じる中で、美的に洗練されたナチの将校が、ベートーヴェンの音楽に涙して人間の情動を露にしていた一方で、無垢な子どもの大量虐殺を指揮する非人間的な人物であったことを引き合いに出し、美的な体験による現実逃避は醜い現実を正当化してしまうとし、これを批判している⁴⁸⁾。

さらに、イーグルトンは、『美的書簡』に隠されたイデオロギー的機能について論じている。彼は、「美的なものが遂行しているのは、本質的に予備的な役割であり、感覚的生活という未加工の素材を、理性の手による最終的な征服のために加工し、緩和⁴⁹⁾」すると述べ、さらにシラーの描く美的状態に関し、あらゆる規定から解放されているという状態は「ブルジョワ社会そのものがいだいている絶対的な自由という夢⁵⁰⁾」であるに過ぎないとした。こうして『美的書簡』は、理性のイデオロギーに感性を巧みに奉仕させるものとみなされるのであった。(『美的書簡』現実遊離説の論者としては、この他にヤンツ⁵¹⁾が挙げられる。)

D. 『美的書簡』未完説——批判の第四類型

『美的書簡』批判の第四類型は、『美的書簡』未完説である。『美的書簡』を未完の書とする説もまた、数多く見受けられる。では、いかなる意味において『美的書簡』は未完だとされるのか。

シュプランガーは、「崇高による美的教育」について論じられていないが故に、『美的書簡』は未完の書であると述べる⁵²⁾。『美的書簡』には「崇高に関する章」が欠けているという見解は未完説の論者たちの共通見解である。これは、『美的書簡』の内容のうちに示唆されていることである。西村は、『美的書簡』において「融解的な美(schmelzende Schönheit)」と「緊張的な美(energische Schönheit)」という対概念が提示されるものの、実際には後者に関する議論は予告のみに終わっている点⁵³⁾を未完の論拠とする⁵⁴⁾。

『美的書簡』の雑誌掲載当時のタイトルからも未完で

あることは示される。シラーは、第17書簡以降、第27書簡までを「ホーレン」誌に掲載したとき、その全体のタイトルを「融解的な美」として、「ホーレン」誌上では「緊張的な美(=「崇高」)」については触れることなく『美的書簡』を閉じている⁵⁵⁾。この点に関し、平山は『美的書簡』では、「崇高」に相当する「緊張的な美」について論じられていないと指摘し、「崇高」を扱った他の論文、とりわけ『美的書簡』と執筆時期が近いとされる『崇高について Über das Erhabene』が『美的書簡』を内容的に補うと主張し、シラー思想の全体像を把握する上で重要な意味を有すると述べる⁵⁶⁾。『崇高について』が『美的書簡』を補完することは『崇高について』におけるシラー自身の記述から推測されることである。

「美的教育が完全な全体になるためには、そして我々の使命の全範囲に、そしてかくして感性界を超えて人間の心の知覚能力を拡大するために、崇高が美に加わらなければならない⁵⁷⁾」

「崇高」が「美的教育」を完成させるというシラーの記述は、『美的書簡』における美的教育論が未だ不完全であったことを暗示している。

未完説の論者達は、『美的書簡』の記述から、「崇高」に関する議論の欠如を見て取り、さらには『美的書簡』と同時期に執筆された論文『崇高について』がこれを補完すると主張する。彼らは、『美的書簡』が未完であることを示す箇所を指摘し、加えてシラー哲学の全体像を把握する上での「崇高論」の重要性を強調するのであった(『美的書簡』未完説の論者としては、他にシャープ⁵⁸⁾、金田⁵⁹⁾、浜田⁶⁰⁾、内藤⁶¹⁾、五郎丸⁶²⁾が挙げられる)。

以上、『美的書簡』批判をその批判内容に応じて四カテゴリーに類型化し、それぞれの主張を概観した。「はじめに」にも記した通り、この四類型のうち、筆者は『美的書簡』未完説に依拠する。この説に依拠し、「崇高論」分析を行なうことで、シラー美的教育論再解釈のための方途を見出すことが可能となるように思われる。次節では、その一つの可能性を提示すべく、『美的書簡』解釈上の最大のアポリア(「美」は「道徳的状態」に至るための「手段」か、それとも「目的」か)に対し、「崇高論(『崇高について』)」に基づいた回答を試みたい。

Ⅲ. 「美」は「手段」か「目的」か——「崇高論」に依拠した回答

『崇高について』は、標題が示す通り、「崇高」概念に

ついて論じられたテキストであるが、シラーは「美(優美)」との対比で「崇高」概念を分析する。シラーは、「美(優美)」と「崇高」、両者の内実と関係を詳細に論ずる中で、前者を感性界(Sinnenwelt)、後者を叡智界(intelligibele Welt)に属するものとして厳密に区別した。シラーは、「美(優美)」と「崇高」どちらか一方のみを称揚することはせず、相反する二原理、「美(優美)」と「崇高」の統合状態こそを到達すべき目標とした。

ここでシラー哲学における「美」の用法について一言触れておく。シラー哲学における「美」は、広義においては「崇高」をも含む概念であるが、『崇高について』において「美」という場合は、狭義の「美」すなわち「優美」を意味することを特記したい。

シラーが『崇高について』で、目指すべき状態を、「美(優美)」と「崇高」の統合状態としている事実を前提とするならば、上記のアポリア(「美」は「手段」か、「目的」か)に対し、一つの回答が得られるように思われる。すなわち、『崇高について』を論拠とするならば、「美(=広義の「美」、 「崇高」を含む)」はそれ自身が「目的」であると回答できるのではないか。『崇高について』では、「道徳的状態」は感性界の原理を脱した状態として論じられていた。しかしながら、このような「道徳的状態」は目指すべき究極目的ではなかった。『崇高について』の結論部を引用しよう。

「我々が得ようとして努力する最も高い理想は、我々の至福の守護神としての自然的世界と、至福を保持するために我々の品位を決定する道徳的世界との関係を断つことを強要されることなしに、良き自然に留まることである⁶³⁾」

道徳的世界との関係を断たずに、自然的世界(=感性界)に留まることこそが理想として描かれるのである。「美(優美)」と「崇高」、両者の統合状態(=広義の美、『美的書簡』の術語に換言するならば「美的状態」)において、道徳的要素は欠落しない。そのうちに既に道徳的要素を含み持っているのである。確かに『美的書簡』には「美的状態」を「道徳的状態」に至るための「手段」として位置づけていると読み取れる箇所がある。それをテキストの矛盾とみるか、構造上の分裂とみるかはもはや問題ではない。「道徳的状態」があくまでも感性界を離れたものである以上、『崇高について』を前提とするならば、これは目指すべき状態とは言えない。『崇高について』を論拠としてシラー美的教育論を読み解くならば、「道徳的状態」が最終目標だという結論に

はなりえないのである。

Ⅳ. おわりに——シラー美的教育論再構築への展望

本論考では、様々な『美的書簡』批判をその批判内容ごとに四カテゴリーに類型化した。本論考の主眼は『美的書簡』批判を網羅的に概観することにはなく、批判の諸傾向の大まかな分類により、繰り返し指摘される『美的書簡』の問題点を明確化することにあつた。あまた存在する『美的書簡』批判のすべてがこれら四類型に分類できるわけではなく、これに回収されない議論も存在しよう。しかしながら、同一傾向の批判をカテゴライズすることによって、『美的書簡』批判のある種の傾向性を確認することができたかと思われる。

とりわけ、本論考の類型のうち、『美的書簡』未完説は、シラー美的教育論を解説する上で、極めて重要である。『美的書簡』、『崇高について』両論文は同時期に成立しているとされ、『崇高について』に現存する枠組みは同様に『美的書簡』にも(それは明示されず、潜在的にはあるが)見て取ることができる。つまり、『崇高について』の意義は、シラーがここにおいて『美的書簡』の内容を補填し、自身の美的教育論を完成させた点にのみ存するのではない。その最大の意義は、このテキストが『美的書簡』の矛盾・分裂を認容した上で、尚且つ、シラー美的教育論に貫流する思想を読み解くための方途を提示する点にあるといえる。『崇高について』ではシラー哲学の重要命題が極めて明瞭に記されており、『美的書簡』のうちにも確かに潜在する根本原理をここに見出すことが可能である。『美的書簡』では浮動し、未確定であったシラー哲学のテーゼが『崇高について』では、簡潔かつ明確に論じられているのだ。この場合、形式面から考えても『崇高について』を分析する利点は大きい。『崇高について』は統一的意図の下で書き下された「論文」であり、その内容の矛盾、分裂が指摘されることはない。対して『美的書簡』はあくまでも「書簡」形式の論文であり、そもそも秩序立てて書き下ろされたものではない。その形式から考えて、動揺、矛盾が端々にみられるのもある意味では当然と言えるのである。

『美的書簡』未完説の論者たちは、「崇高論」分析の必要性を説くものの、それをシラー美的教育論の再解釈を可能にする地盤とは見なしておらず、また、「崇高論」を基にした具体的な分析は行っていない。従って、『崇高について』を精緻に分析することにより、シラー哲学の根本原理を明らかにし、『美的書簡』の諸概念を

読み解くための、揺るぎ無い地盤を構築することが課題として浮かび上がる。そして、その地盤を基に、シラー美的教育論の再構築が図られるべきである。シラー美的教育論再解釈の一つの可能性として、第Ⅲ節では、『美的書簡』解釈上のアポリアに対して、「崇高論」に依拠した回答を試みた。しかしながらその回答は、紙幅の都合上、極めて簡潔なものとならざるを得ず、解釈の可能性を示唆したにすぎない。本論考ではシラー美的教育論再構築の可能性の一端を示すに留まることとなったが、この試みについては、機会を改め、「崇高論」によるシラー美的教育論再考の試みとして、特化して論ずることとする。

(指導教員 西平直准教授)

註

- 1) フンボルトは論文「男性形式と女性形式について」で、美について論ずる中で、読者に『美的書簡』における美の概念の想起を促している。[Humboldts, W. 1968: Über die männliche und weibliche Form, In: *Wilhelm von Humboldts gesammelte Schriften*, Bd.1, Walter de Gruyter & Co., Berlin, S.352.]
- 2) シラーから絶大な影響を受けたヘルダーリンは、1796年の書簡にて、当時執筆中の論文に関し、「『人間の美的教育についての新書簡』と命名するつもりでいます」と述べ、「この書簡において、哲学から文学および宗教にまで論及することになりましょう」と予告している。[Hölderlin, F. 1970: *Sämtliche Werke und Briefe*, Bd.2, Carl Hanser Verlag, München, S.690. = 1969: 手塚富雄他訳『ヘルダーリン全集 4 論文／書簡』, 河出書房新社, 242頁]
- 3) シェリングの『先験的観念論の体系』は、その成立に際し、シラーの『美的書簡』から多大な影響を受けたといわれている。[勝田守一 1936: 『シェリング』, 弘文堂書房, 148頁]
- 4) デイルタイは彼のシラー論において『美的書簡』とゲーテ『ファウスト』の思想的類縁性を指摘している。[Dilthey, W. 2006: *Dichter als Seher der Menschheit: die geplante Sammlung literarhistorischer Aufsätze von 1895*, In: *Wilhelm Dilthey gesammelte Schriften*, Bd.25., Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, S.591.]
- 5) ニーチェは自伝集にて18歳の時に、『美的書簡』を読みはじめたことを記している。[Nietzsche, F. W. 1934: *Jugendschriften 1861-1864*, In: *Werke und Briefe: historisch-kritische Gesamtausgabe*, Bd.2, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, S.100.]
また、自伝にはシラーを称える箇所が多く見受けられる。
- 6) 『美的書簡』に関し、デュレイは以下のように述べる。「遊戯説に含まれる思想の最も明白な哲学的叙述はシラーの『人間の美的教育に関する書簡』の中に見られる。[...]シラーは遊戯と芸術が必然的な現象と先験的な自由との二領域の間の中間の過渡的な場所を占めると説き、併せてわれわれをして自由の責務を認めさせ、またこれを果たさせるように教えたのである。彼の見地はカント哲学の枠内にとどまっていたが、カントの厳格な二元論を脱却しようとして、芸術家として果敢な試みをした」。

- [Dewey, J. 1934: *Art as experience*. Minton, Balch & Company, New York, p.281.=1969: 鈴木康司訳『芸術論—経験としての芸術』, 春秋社, 311頁]
- 7) ベルクソンは美学に関する講義の中で、『美的書簡』に言及している。[ベルクソン, H. 2000: 合田正人・谷口博史訳『ベルクソン講義録 II 美学講義 道徳学・心理学・形而上学講義』, 法政大学出版局, 473頁]
- 8) シュタイナー学校の創設者として知られるルドルフ・シュタイナーは、「シラーの美学書簡は美の本質を自由の理念の内に見ようと、それが自由という原理によってくまなく満たされているがゆえに、全く気高い著作」であるとし、『美的書簡』を評価している。[Steiner, R. 2003: *Grundlinien einer Erkenntnistheorie der Goetheschen Weltanschauung mit besonderer Rücksicht auf Schiller*, Rudolf Steiner Verlag, Dornach, S.117. = 1991: 浅田豊訳『ゲーテ的世界観の認識論要綱』, 筑摩書房, 115頁]
- 9) ミードも著作の中で『美的書簡』に触れる。[Mead, G. H. 1936: *Movements of Thought in the Nineteenth Century*, the University of Chicago Press, Chicago & London, p.66.]
- 10) カッシーラーは『自由と形式』において『美的書簡』に言及している。[Cassirer, E. 1961: *Freiheit und Form, Studien zur deutschen Geistesgeschichte*, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt]
- 11) ハイデッガーは、ニーチェ講義の中で以下のように論じている。「カント美学を結晶している『判断力批判』は、これまでただ、重なる誤解にもとづいてのみ影響を及ぼしてきたと言える。哲学史のひとつの皮肉な事実である。ただひとりシラーだけが、美と芸術についてのカントの論に関して、その本質的なものを把握していた。だがシラーの認識も、十九世紀の美学によって流され捨てられてしまったのである」。[Heidegger, M. 1961: *Nietzsche*, Bd.1, Neske, Stuttgart, S.127.= 1986: 藪田宗人訳『ニーチェ I』, 白水社, 133頁]
- 12) ハーバート・リードは『芸術による教育』において、「倫理と審美学に対して同一の基礎を見出させる可能性について、シラーは肯定的に論じ、これに反しキルケゴールは否定的に論じている」と述べ、シラーの肯定論に加担することを宣言し、読者に『美的書簡』の参照を呼びかけている。[Read, H. 1945: *Education Through Art*, Faber and Faber, London, pp.263-264. = 1953: 植村鷹千代訳『芸術による教育』, 美術出版社, 303-304頁]
- 13) 『エロスの文明』においてマルクーゼは『美的書簡』を引き合いに出し、これに自らの解釈を与える。[Marucuse, H. 1956: *Eros and Civilization: A Philosophical Inquiry into Freud*, Routledge, London]
- 14) ヘルマン・ノールはゲッティンゲン大学の講義において、『美的書簡』に言及している。[ノール, H. 1997: 島田四郎監訳『ドイツ精神史—ゲッティンゲン大学講義』, 玉川大学出版部, 180頁]
- 15) エリクソンは遊びについて論ずる中で、『美的書簡』の一文(「人は遊んでいる時のみ、完全に人間的である」)を引用する。[Erikson, E. H. 1950: *Childhood and Society*, W. W. Norton & Company, New York, p.212]
- 16) アドルノは『美の理論』において『美的書簡』に言及している。[Adorno, T. 1972: *Ästhetische Theorie*, In: *Gesammelte Schriften*, Bd.7, Suhrkamp, Frankfurt am Main, S.470.]
- 17) ハーバーマスは、『近代の哲学的ディスクルス I』の付論にて、『美的書簡』に言及している。[Habermas, J. 1985: *Exkurs zu Schillers Briefen über die ästhetische Erziehung des Menschen*, In: *Der philosophische Diskurs der Moderne*, Frankfurt am Main]
- 18) シラーとボイスの関係については、平山敬二「シラー思想とボイスの思想—美的国家の構築をめぐる—」(『ヨーゼフ・ボイス—ハイパーテキストとしての芸術』, 慶応義塾大学アート・センター, 1999年)を参照。
- 19) ロロ・メイは「私を含めて多くの人がびとがそう思っているのですが、現代の西欧文化のなかで、美についての最も偉大で最も豊かな理論は[...]フリードリッヒ・フォン・シラーによって書かれたもの」だと述べ、さらに『美的書簡』には「美の意味についての、おどろくほどに深い洞察が書かれて」いるという。[メイ, R. 1992: 伊東博訳『美は世界を救う』, 誠信書房, 30頁]
- 20) Kant, I. 1913: *Briefwechsel von Imm. Kant*, Bd.3, Georg Müller, München, S.66.=1977: 観山雪陽・石崎宏平訳『カント全集 第18巻 書簡集2』, 理想社, 322頁
- 21) Hegel, G. W. 1952: *Briefe von und an Hegel*, Bd.1, Verlag von Felix Meiner, Hamburg, S.25.
- 22) エミヒョーベン, F. W. 1980: 伊藤勉・中村康二訳『ルドルフ・シュタイナー』, 人智学出版社, 90頁
- 23) Jung, C. G. 1967: *Psychologische Typen*, Rascher, Zürich, S.70.= 1987: 林道義訳『タイプ論』, みすず書房, 76頁
- 24) エンデ, M. 1998: 田村都志夫訳『エンデ全集19 エンデのメモ箱下』, 岩波書店, 21頁
- 25) Spranger, E. 1972: *Erzieher zur Humanität*, In: *Eduard Spranger Gesammelte Schriften*, Bd.11, Quelle & Meyer, Heidelberg, S.232.
- 26) *Ibid.*, S.186.
- 27) 発表当時、フリードリッヒ・ニコライやフィヒテが『美的書簡』の表現の難解さを批判した。[内藤克彦 1999: 『シラーの美的教養思想—その形成と展開の軌跡—』, 三修社, 178頁]
- 28) シラーは『美的書簡』で具体的に何を描き出そうとしたのか。この問題については既に、拙稿「シラー『美的書簡』における「遊戯衝動」—ゲーテ文学からの解明」において分析を試みている。本論考では、『美的書簡』は「ゲーテの肖像画」である、というシラーの告白を拠り所として、抽象概念たる「遊戯衝動」をゲーテ文学へと還元し、その具象化を試みた。[井藤元 2007: 「シラー『美的書簡』における「遊戯衝動」—ゲーテ文学からの解明」, 『研究室紀要』第33号, 東京大学大学院教育学研究科教育学研究室]
- 29) 長谷川哲哉 2001: 「シラーの美的教育論とミューズ教育思想」, 『和歌山大学教育学部紀要 教育科学』第51集, 和歌山大学教育学部
- 30) Gadamer, H. G. 1975: *Wahrheit und Methode: Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, J. C. B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen, S.78.=1986: 饒田収他訳『真理と方法 I』, 法政大学出版局, 117-118頁
- 31) Eagleton, T. 1990: *The Ideology of the Aesthetic*, Basil Blackwell, Oxford, p.112.=1996: 鈴木聡・藤巻明・新井潤美・後藤和彦訳『美のイデオロギー』, 紀伊国屋書店, 162頁
- 32) *Ibid.*, p.110.=同上, 160頁
- 33) Janz, R. P. 1998: *Über die ästhetische Erziehung des Menschen in*

- einer Reihe von Briefen, In: *Schiller-Handbuch*, hrsg. von Helmut Koopmann, Alfred Kröner Verlag, Stuttgart, S.623.
- 34) Schiller, J. C. F. 1961: *Über die ästhetische Erziehung des Menschen*, Verlag Freies Geistesleben, Stuttgart, S.16.=1982: 浜田正秀訳「人間の美的教育について一連続書簡」, 『美的教育』所収, 玉川大学出版部, 131頁
- 35) レーマンも美が一方で目標であり, 他方で手段であるというシラー美的教育論における美の二面性について論じ, 両者の動揺が見られると主張する。[Lehmann, R. 1921: *Die Deutschen Klassiker: Herder-Schiller-Goethe*, Verlag von Felix Meiner, Leipzig, S.231.]
- 36) 同じくヘンリッヒは, 『美的書簡』の矛盾について, シラーにとって, 「理想とは一方ではカントと共にすべての感性的なものの彼方にある目標であり, 他方この模範像は, まさにその中に直接性(感性)と彼岸性との総合が考えられていると述べ」, ここに矛盾を見て取る。[Henrich, D. 1957: *Der Begriff der Schönheit in Schillers Ästhetik, Zeitschrift für philosophische Forschung* 11, S.546.=1981: 甲斐実道訳「シラーの美学における美の概念」, 『海外事情研究』第8巻 第2号, 熊本商科大学海外事情研究所, 134頁]
- 37) 五郎丸も『美的書簡』の内部には, 道徳の完成を目指すカント的な目的論と人間学的全体を頂点とする座標軸とが並存しているといい, 前者では道徳的で理性的な人間及び文化へと至ることが人間の使命とされ, 道徳的國家の建設が座標の最高点となり, 後者では, 人間における自然と理性, 感性と道徳性, 受動性と能動性との調和的統一が理念とされ, 美的國家が最高の社会形態とされているという。五郎丸は, シラーが明らかに矛盾しあった道徳的目的論と人間学的座標の間を揺れ動くため, 『美的書簡』において, 一方では美が道徳に奉仕し, 他方では道徳に対し優越すると指摘し, この点に『美的書簡』の矛盾を見出す。[五郎丸仁美 2004: 『遊戯の誕生 カント, シラー美学から初期ニーチェへ』, 国際基督教大学比較文化研究会, 96-97頁]
- 38) 西村拓生 2003: 「『美しい仮象の国』はどこにあるのか?—シラーの『美育書簡』をめぐる, 仮象の人間形成論のための覚え書」, 矢野智司・齋野克己編『物語の臨界—「物語ること」の教育学』, 世織書房, 291頁
- 39) 同上, 291-292頁
- 40) 岩切利雄 1976: 「シラーの『アウグステンブルク王子宛書簡』と『美的教育書簡』の関連について」, 『ドイツ文学論集』, 水野忠敏教授・滝沢寿一教授退官記念論集刊行会, 125頁
- 41) 例えば「王子宛書簡」には見られない「仮象」概念に関する論及が『美的書簡』において, 新たに付け加えられている。
- 42) Lutz, H. 1967: *Schillers Anschauungen von Kultur und Natur*, In: *Germanische Studien Heft60-62*, Kraus, Nendeln, S.221-224.
- 43) ルッツの『美的書簡』分析に関しては, 山下純照「シラーの美的教育論—「手段」としての美と「目的」としての美の関係」(『待兼山論叢 美学篇』第22号, 大阪大学文学部, 1988年)に詳細な紹介がなされている。
- 44) 『美的書簡』の分裂に関し, デュジンは, 第2書簡から第8書簡は「自分自身の時代との対決」を扱い, 第11書簡から15書簡は「思弁の哲学」について論じ, 第17書簡から第22書簡は「美の理論」に言及しているという。そのうち「思弁の哲学」と「美の理論」の部分は「王子宛書簡」とは関係がなく, 第23書簡からは, 内容的に「王子宛書簡」の問題に関連すると指摘する。[Düsing, W. 1981: *Friedrich Schiller. Über die ästhetische Erziehung des Menschen in einer Reihe von Briefen: Text, Materialien, Kommentar*, Carl Hanser Verlag, München Wien, S.140.]
- 45) Gadamer 1975, S.78-79.= 1986, 118頁
- 46) Lukács, G. 1956: *Zur Ästhetik Schillers*, In: *Beiträge zur Geschichte der Ästhetik*, Aufbau-Verlag, Berlin, S.39.=1969: 古見日嘉訳「シラー美学よせて」, 『ルカーチ著作集 7』, 白水社, 167頁
- 47) *Ibid.*, S.30.=同上, 152-153頁
- 48) 彼はこのような批判に続けて以下のように述べる。「このパラドクスは, これほど極端ではないにせよ, 絶えず繰り返されている。そこに描かれた社会の犠牲者に関心を持つよう情緒的に書かれた芝居を見終わり外に出て, 現実の乞食の側を慌ただしく通り過ぎていくようなものだ。[...] 芸術という仮象は, シラーがそうに違いないと示したほど無垢でもないし, 道徳的効果のあるものでもない。仮象としての美や想像力の遊戯としての芸術は, 美的なものを, 現実からの逃避として, 区画の中に閉じこめるよう促すのだ。これは醜い現実という非美的世界の血なまぐささを正当化するのに手を貸すのである」。[シュスターマン, R. 1999: 秋庭史典訳『ポピュラー芸術の美学—プラグマティズムの立場から』, 勁草書房, 80頁]
- 49) Eagleton 1990, p.105.=1996, 153頁
- 50) *Ibid.*, p.109.=同上, 158頁
- 51) ヤンツは, 芸術が個人と社会に対してもつ和解の可能性は, 政治的条件のもとではその無力さが判明するという。彼は「美しい仮象の国」(「ごくわずかの選ばれたサークル」)でだけ実在する「美的國家」は, 政治的自由を提供しはしないと述べ, 『美的書簡』では上流階級の交際形式が賞賛されるが, それによって貴族の美的習慣のみ復権されるのか, もしくは洗練されていない市民がそれを真似るべきなのかは決定できないと述べる。[Janz 1998, S.624.]
- 52) Spranger 1972, S.237-239.
- 53) 西村 2003, 301頁
- 54) 西村は, この他にもシラーが美しい仮象の必然的な限界について, 後に改めて論ずると述べながら, それに相当する議論が見当たらない点にも『美的書簡』の不完全性を見出している。[同上, 301頁]
- 55) 内藤 1999, 219頁
- 56) 平山敬二 1988: 「シラーの崇高論—カント美学の受容における異見的一局面」, 『美学』153号, 美学会, 10頁
- 57) Schiller, J. C. F. 1980: *Über das Erhabene*, In: *Sämtliche Werke*, Bd 5, Carl Hanser Verlag, München, S.806-807.
- 58) Sharpe, L. 1995: *Schiller's Aesthetic Essays: Two Centuries of Criticism*, Camden House, Columbia, pp.4-5.
- 59) 金田も『美的書簡』においてシラーは単に融解的な美の作用についてのみ語ったと述べ, それゆえに粗野な自然人間を美によって醇化し, 感性的なものから理性的なものへの方向を与えることの論証が, この書簡の主要課題であったという。「精力的な美の作用がこの書簡の表面に現れなかったという点において, 『美

的教育書簡』は、未だ完全には彼の美学理論をつくしたものとはいえない。[金田民夫 1968：『シラーの芸術論』，理想社，159頁]

- 60) 浜田も同様の点を指摘する。『美的書簡』では、「融和の美」と「力の美」という二つの狭義の美のうちの主として「融和の美」の方だけの説明がなされていて、「力の美」についての説明が欠けているが、その「力の美」についての説明が『崇高について』の論文の中で述べられている。[前掲訳書，『美的教育』，訳者解説 35-36頁]
- 61) 内藤も「崇高論」が『美的書簡』を補完すると述べる。「崇高論が加わらなければ，美的教育論は完結しないと言うところに，シラーの理性的感性的人間観の特質は明瞭に現れている。[…]美と崇高とは，シラーの考える人間性にとって，いわば車の両輪のようなものであった」。[内藤 1999，249頁]
- 62) 五郎丸も『美的書簡』の不完全性を指摘する。「『美的教育』という書物は「トルソー」であり，構造上の屈折や主張の揺らぎ，不統一が甚だしい。トルソーだという批判は，約束を半分しか果たさないこの書物の悪癖を指しており，なかでも最も大きな欠落が力動的な美についての説明である。美的教育のプログラム全体の見取り図を手に入れようとするなら，崇高論にも配視しなければならない理由はそこにある」。[五郎丸 2004，96頁]
- 63) Schiller 1980, S.804-805.